時代の眼

比較社会保障・社会福祉の方法について

一番ヶ瀬　康子

わが国の社会保障・社会福祉の前史において，明治以前は，中国からの制度や方法から学び，また明治以後は主として英米の在り方から，多くのものを学んできたように思う。しかしそれを実際に実現する時にはかなり変えられ，また日本の現実にあったように手直しがされている。たとえば中国の制度の一つである三倉の制度にしても，わが国の場合には，どちらかというと義倉が多く，しかもそのネーミングもさまざまである。たとえば渡辺崋山がつくった報民倉というネーミングは，中国には見られない名前である。日頃，働き藩をささえている民に報いるということであろうか。その時，すでに蘭学を学んでいた渡辺崋山のなかに，ヨーロッパ思想も影響を与えていたからであろう。いずれにしても日本は，雑種文化といわれるように，福祉においてもさまざまな国の成果が混在，相関連してとりいれられているように思う。

戦後とりわけ高度経済成長以降は，英米につづいてスウェーデン等北欧からの考え方や在り方も学んできた。だが，それもEU等の影響で，今日変化しつつあることをどうとらえるかという時期にきている。また現在話題の公的介護保険も，ドイツの介護保険が注目されてのことであることは，周知の通りであろう。いずれにしても一辺倒に諸外国のものを鵜呑みにするのでは，現実に事はすまない。そのことを考えた時，改めて社会保障・社会福祉の比較方法を今積極的に検討する時期にきているのではないだろうか。

私の大まかな仮説では，工業化の進展と民主化の度合いとのクロスのなかで，その在り方をキャッチしながら制度の比較を試みていく方法が適格であったように思う。ところが，さいきんアジアやアフリカの社会福祉を考える時に，それだけではすまないのではないかという思いが募ってきた。というのは，そこに風土の介入が必要であるように思うし，同じ開発途上国のことを考える場合に，従来植民地であったところ，また市場経済を導入して進みつつあったところ，社会主義国であったところでは，やはり福祉への思いや在り方が違うということに気がついたからである。このことの

気づきは，実は私が，モンゴルの福祉計画についての支援を頼まれたことに端を発する。

1997年，私はモンゴルを訪れた。またモンゴルに関する諸文献を読むにつれて，気がついた。モンゴルは，世界第２の社会主義国であった。それだけに，この50年来，モンゴル人は，教育をロシア語で受けていた。さらに徹底した平等主義思想が普及していた。くわえて，遊牧生活での人々が多く，経済史的にいえば農業時代をぬきに，今，工業化を進めつつあるのである。したがって市場経済での混乱に対する社会保障や社会福祉への想いは，平等を基礎としてかなり強いものがある。とくに社会主義時代には，社会福祉は存在しなかった。それは，それぞれが地区の計画経済にうらづけられたインフォーマルな相互扶助のなかに内包されていたのであろう。

しかも，そのような歴史以上に，ショックだったのは，風土の問題である。都市に人口が集中するなかで住宅保障は不可欠である。だが，日本の建築，都市計画の専門家から聞いた話であるが，モンゴルでは，かなり精巧なマンション風の建物を建てても，砂漠の砂が舞い込んでくるというのである。一方で，皮でつくった古くからのゲルには，砂が吹き込まない。その神秘ともいえるような遺産をどうとらえるかというのが，大きな課題であるということであった。今日の首都ウランバートルには，約60万人，４分の１の人口が居住しつつある。スラムは拡がり，厳寒のなかで多くの子どもたちは浮浪化している。そのような時にモンゴル人自身が，社会福祉を自らのもととして実践を高めるために，私は，３年間の期限をきった支援を約束した。まず病院ということで現在関係者との話し合いを続けているが，そのなかには，モンゴル医学の成果をどうするかということもある。今まで，余りにも西洋医学に偏った医療保障をつくりあげてきた日本だけに，現在，高齢者のかなりの人たちは，はり・灸はもとより，中国医学に対して，社会保険とは無関係に費用をつかっているのが日本の実態である。

いずれにしても21世紀は，地球がしだいに一つになり，環境保全とともに，福祉の問題は積極的に意味をもってくる時代である。国際ボランティアの活躍も期待される。改めて各国の社会保障・社会福祉への比較認識の方法を，しっかりと探求しなければならない時期であろう。

（いちばんがせ・やすこ　長崎純心女子大学教授）